〔論　説〕

中国語指示代詞の性格に関する再論

王　瑞来

はじめに

昨年刊行した中国語教科書『中国語急就篇』(1)において、筆者は自分の見解に基づき、指示代名詞のことを説明した。だが、教科書の体制と紙幅には限りがあるので、充分に展開することができなかった。それに対して、学界の友人たちはそれを論文の形でさらに述べるよう要望を出してきた。ここでは、浅学を顧みず、長い間の中国語教育の実践を通して形成してきた自分の考えを提出して、学界の師友に一つの討議ひいては批判の的を挙げるのみならず、中国語学習者の参考にも供したいと思う。中国語の指示代名詞については、数年前に筆者は一つの小論(2)を発表したことがあるが、それが主に文化的視点からの考察であったのに対して、今回は、単に具体的、かつ技術的な問題だけを論じていきたい。同じ指示代名詞に関する論考なので、ひとまず前作の続編として、「再論」と名付けたものである。

一、指示代詞の言い方について

以前、筆者の小論においても、「指示代名詞」という言い方には疑問を抱かずに使用していた。だが、今回の教科書を執筆する際に、学習者の学ぶ便利のために、「指示代名詞表」をまとめるとき、「指示代名詞」という言い方自体が適当かどうかの問題をはじめて感じた。

いうまでもなく、「这」「那」「哪」というものは、多くの場合、日本語の言語学術

(1)『文法と練習を中心に ── 中国語急就篇 ── 初級から中級まで』白帝社　2002年4月。
(2)「中国語における指示代名詞の性格について」『呴沫集』第9号　1996年4月。

語のままで「指示代名詞」と呼ばれても問題が全然ないと思われる。たとえば、「这是……」「那是……」「哪是……」というような主語として使うとか、「这个(些) 」「那个(些) 」「哪个(些) 」というように量詞と接続するとか、「这里(儿) 」「那里(儿) 」「哪里(儿) 」というように方位詞と接続するとか、以上の場合、「这」「那」「哪」は全く名詞的性格を持っているため、「代名詞」と呼ぶことができる。

ところが、つぎの場合は、問題が生じてくると思われる。つまり様態を表す「样」「么」などの接尾語と接続する場合、名詞的性格が変わってしまうのである。

まず「样」と接続する場合の「这样」「那样」を見てみよう。

例：这样的人;那样的衣服 （このような人；そのような服）

つぎは「么」と接続する場合の「这么」「那么」を見てみよう。

例：这么写;那么做 （このように書く；そのようにやる）

以上の例が示したように、ここでの「这」「那」は明らかに連用修飾語の性格をもっている。つまり、「指示代動詞」「指示代形容詞」のようなものになった。それゆえ、この場合では、「这」「那」を指示代名詞とは言い難いであろう。ところが、それらの例文を見れば、「这」「那」は相変わらず指示的な役割を果たしている。これを鑑み、筆者は名詞の「名」を避けて、中国語の文法術語の言い方を導入して、直に「指示代詞」と呼ぶ。以下、本稿の指示代名詞はすべて「指示代詞」という言い方を使って表す。

二、指示代詞の数量関係について

数多くの中国語の教科書では、指示代詞を説明する場合、よく単数・複数で説明している。つまり、「这个」「那个」「哪个」で指示代詞の単数を表す。「这些」「那些」「哪些」で指示代詞の複数を表す。しかし、深く考えれば、こうした説明はかなり問題がある。

確かに「这个」「那个」「哪个」は単数を表し、「这些」「那些」「哪些」は複数を表す。それに対しては、全く問題がない。ところが、これは指示代詞の固有な性格であろうか、という点をまずは問わねばならない。もしこれは指示代詞の固有な性格であれば、「这是土地」（これは土地だ）「那是海洋」（あれは海だ）という文の中の

「这」と「那」は、単数であろうか、複数であろうか。これはどちらともいえないのではないだろうか。「这个」「那个」「哪个」と「这些」「那些」「哪些」が単数と複数を表すのは、その「个」「些」という後綴りによってもたらされたからである。それゆえ、厳密にいえば、指示代詞は指示される人・物・事・状態・動作などの対象の代わりに使用するものとして、それ自体は数量的な性格を持たない点に注意が必要なのである。

「这个」「那个」「哪个」と「这些」「那些」「哪些」のみを用いて中国語の指示代詞の単数・複数を表すという不適当は、以上の論述によってすでに明らかにしたと思われる。一歩譲っても、「这」「那」「哪」＋「个」と「这」「那」「哪」＋「些」という形で、何も説明を加えずに指示代詞の数量関係を表すことは、適当ではないと言えるであろう。

なぜ指示代詞に「个」「些」をプラスすると、単数・複数という数量が表されるのか。これは「个」「些」の量詞性格によって決まったのである。「个」は一般量詞として、一つの量を表すので、「这」「那」「哪」＋「个」は単数を表すのである。同様に「些」は不定量詞として、少なくとも二つ以上の不確定の量を表すので、「这」「那」「哪」＋「些」は複数を表すのである。ところが、「这本书」（この本）「那张纸」（その紙）「哪条河」（どの川）というような例が示すように、「本」「张」「条」などのほかの一般量詞が指示代詞と接続しても、単数を表すことができるし、「这堆菜」（この一山の野菜）「那点儿钱」（そのくらいのお金）「哪群羊」（どの群れの羊）というような例が示すように、「堆」「点儿」「群」などのほかの不定量詞と接続しても、複数を表すことができる。つまり、中国語では「个」「些」のみならず、指示代詞の後ろに、すべての一般量詞が接続すると単数を表し、すべての不定量詞が接続すると複数を表すのである。

筆者が作った教科書では、指示代詞を説明するところで、数量関係にも触れた。だが、以上に指摘した従来の表現を意識的に避けて、「量詞後綴り（単数）」と「不定量詞後綴り（複数）」という表現に変えて、前者は「这＋量詞」「那＋量詞」「哪＋量詞」という具体的な形で表し、さらに学界が馴染んだ「这个」を用例として説明した。同様に後者は「这＋不定量詞」「那＋不定量詞」「哪＋不定量詞」という具体的な形で表し、さらに学界が馴染んだ「这些」を用例として説明した。これによって

従来の表現の一面性を正そうとしたのである。

ついでに触れたいのは、数量関係でなく、指示代詞の場所表現である。ほとんどの中国語の教科書は、説明せずにそのまま「这里(这儿)」「那里(那儿)」「哪里(哪儿)」という形で指示代詞の場所表現を表しているが、実は指示代詞自体は場所も表さず、後ろに「里」などの場所を表す言葉と接続すると、はじめて場所を表すことができるようになる。もちろん主語としての指示代詞が後ろの「是」という特殊動詞を結ぶ目的語と相応すれば、単独に場所が表せる。たとえば、「这是图书馆」(これは図書館だ)「那是教室」(あれは教室だ)「哪是厕所」(どれがトイレか)などである。でも、特に強調したいのは、これは指示代詞自体の性格ではなく、後ろの目的語によってもたらされたものである。また「这是图书馆」「那是教室」「哪是厕所」の中の「这」「那」「哪」は、「这里(这儿)」「那里(那儿)」「哪里(哪儿)」の省略と見なすこともできなくはない。

三、指示代詞の発音変化について

「这」は「zhè／zhèi」、「那」は「nà／nèi」、「哪」は「nǎ／něi」、という形で、数多くの中国語の教科書が指示代詞を説明するとき、発音を表しており、そしてほとんどその発音変化の理由を説明しない。説明があっても、多くは口語では斜線の後ろのような発音をするという程度である。この発音変化および口語という説明については、その数多くの中国語教科書の著者たちが勝手にしたことでなく、充分な理論的根拠があると思われる。たとえば、最も権威ある中国社会科学院語言研究所の『現代漢語詞典』(1996年版)に

> 口語では「这」の後ろに量詞あるいは数詞プラス量詞が接続する場合、常に「zhèi」という。(p.1595、原文中国語、以下同)
>
> 口語では、「那」の後ろに量詞あるいは数詞プラス量詞が接続する場合、常に「nèi」あるいは「nè」という。(p.908)
>
> 口語では、「哪」の後ろに量詞あるいは数詞プラス量詞が接続する場合、常に「něi」あるいは「nǎi」という。(p.908)

とある。

最も普及される中国人の愛用書である『新華字典』(1998年修訂版)に

「这(zhèi)」は「这(zhè)」と「一」の合音であるが、数量を指す場合、一に限らない。(p.629、原文中国語、以下同)

「那(nèi)」は「那(nà)」と「一」の合音であるが、数量を指す場合、一に限らない。(p.358)

「哪(něi)」は「哪(nǎ)」と「一」の合音であるが、数量を指す場合、一に限らない。(p.357)

とある。

比較的新しい『講談社中日辞典』に

「这(zhè)」は話し言葉ではしばしばzhèiと発音する。(p.2005)

「那(nà)」は話し言葉ではしばしばnèiまたはnèiと発音する。(p.1128)

「哪(nǎ)」は話し言葉ではしばしばněiまたはnǎiと発音する。(p.1126)

とある。

ほかの中国語辞書もだいたい大同小異である。これは中国語教科書の著者たちが依拠する根拠であろう。ところが、以上に取り上げた指示代詞「这」「那」「哪」の発音変化の説明については、正しいところもあるし、誤りのところもあると思われる。ここでは、この点について検討したい。

「这」(zhè/zhèi)、「那」(nà/nèi)、「哪」(nǎ/něi)の斜線の後ろのような発音は、単に口語での発音であるという解釈とすれば理屈が足りないと思われる。たとえば、同じく口語でも、前出した「这是图书馆」「那是教室」「哪是厕所」の中の「这」「那」「哪」は、変化せずに本来の発音のままで「zhè」「nà」「nǎ」といわれる。やはりその発音変化は『現代漢語詞典』と『新華字典』が指摘したように、その後ろに接続する量詞あるいは数詞プラス量詞と大いにかかわる。これは細かく言わずとも自明なことなので、贅言をしない。

ここで、重点をおいて指摘したいのは、以上に引いた辞書の「那」(nà/nèi)と「哪」(nǎ/něi)の発音変化の問題である。これを後続する量詞が指示代詞にどのような影響を与えたのか、という問題から考察していきたい。

まず、なぜ指示代詞はこのような発音変化が生じるのか、という素朴な質問である。この質問に答える前に、振り返ってその指示代詞と接続する量詞の性格をもう

一度見る必要がある。

「指示代詞の数量関係」という前節にすでに指摘したように、量詞の性格について、一般量詞の場合、表している数量は単数であり、つまり一つである。前節に取り上げた例の「这本书」「那张纸」「哪条河」は、それぞれ「这一本书」「那一张纸」「哪一条河」の省略だと見なされる。ところが不定量詞の場合でも、表している数量そのものは複数であるが、その複数はひとまとめの形で表されているので、外在の形式はやはり一つの形である。これをパソコンの術語で喩えれば、不定量詞は一つのフォルダのようなものであるが、そのなかに複数のファイルが存在している。前節に取り上げた例の「这堆菜」「那点儿钱」「哪群羊」もまた、それぞれ「这一堆菜」「那一点儿钱」「哪一群羊」の省略だと見なされる。この点からみれば、実は中国語においては、一般量詞でも、不定量詞でも、その形式上の特徴はあくまで一つのもののようであるといえる。こうした量詞の特徴が指示代詞への影響においてきわめて重要だと思われる。

中国語の量詞の性質を検討し、その「一」的な性格を確認すると、『新華字典』の「这：zhè → zhèi」「那：nà → nèi」「哪：nǎ → něi」という発音変化を指示代詞の本来の発音と「一」との合音である、という明快な説明が理解しやすくなったであろう。また『現代漢語詞典』が述べているように、量詞あるいは数詞プラス量詞が前の指示代詞と接続する場合、指示代詞の発音を変化するようになった。それはまさに量詞が含んでいる「一」の有形または無形の存在によってもたらされたと考えられるのである。

指示代詞と量詞との接続が指示代詞自体の発音変化を引き起こしたことは、以上の考察によって明らかになったと思われるが、もう一つの疑念を釈明しなければならない。つまり、これまでの辞書および教科書が述べる指示代詞の発音変化が適当かどうか、ということである。

以下で指示代詞の発音変化を一つ一つ検討してみよう。

まず「这（zhè）」の発音変化について旧例を結びつけて見てみよう。

「这（一）本书」：この例の「这」と「一」のピンインは、zhè ＋ yīなので、連続して読むと、zhèiになるはずである。また理論上、zhè ＋ yī ＝ zhèi という等式も完全に成り立つ。

さらに「那（nà）」と「哪（nǎ）」の発音変化について旧例を結びつけて見てみると、どうだろうか。

「那一张纸」と「哪一条河」：この二例の「那」と「一」と「哪」および「一」のピンインは、それぞれ nà + yī と nǎ + yī である。それらを連続して読むと、どのような状態になるのか。上述の辞書はいずれも「那：nà→nèi」「哪：nǎ→něi」という発音変化を示した。しかし、以上の「这」の例と同じくすれば、つまり既知項の nèi と něi を算式に入れると、nèi ≠ nà + yī と něi ≠ nǎ + yī、という結果が意外にも出てしまうのである。理論上なら nà + yī = nài と nǎ + yī = nǎi 、という結果になるはずではないだろうか。

この二種類の結果は、どちらが正確なのか。これは直に従来の辞書と教科書の正しさに質疑する。理論は実際に対する帰納である。それゆえ「那」と「哪」の実際上の発音を考察しなければならない。ところが、中国語、特に普通話の土台となった東北方言を母語とし、かつ長い年月にわたって北京で生活する筆者でも、口語での「那」「哪」が量詞と接続するときの発音に対して、正直に言えば、はっきりと断定できない状態にあるのである。つまり、「那张纸」と「哪条河」の発音について、nèi zhāng zhǐ と něi tiáo hé でもよいし、nài zhāng zhǐ と nǎi tiáo hé でもよいである。口語ではその実際の発音が極めて近く、似ている。実際の発音によって断定できなければ、その発音を措定するのは、理論の場に戻すという一途をとるよりほかないのであろう。

そして理論上から見れば、前述したように「这（zhè）」の場合は zhè + yī = zhèi で成り立つことができるが、「那」と「哪」の場合は、nà + yī と nǎ + yī であれば、それぞれ nèi と něi にはならないであろう。それゆえ、結論として、従来の「那」と「哪」の発音変化の nèi と něi という表記は、適当ではなく、正確な表記は nài と nǎi であるべきと思われる。

結びにかえて

ここまで述べると、もう一つの疑問が浮かびだしてきた。つまり「那」と「哪」の発音変化の問題は、複雑ではないのに、なぜこれまですべての辞書と教科書がずっ

と理屈に合わない表記を使っているのか、である。

それを考えると、たぶん原因が二つあるのであろう。一つは「这（zhè → zhèi）」の発音変化の影響を受けたと思われる。同じ指示代詞系統の「这」にこうした「ei」韻母での発音変化がある以上、同じ指示代詞系統の「那」と「哪」の発音変化もいうまでもなく「ei」韻母であるのが、当たり前のことだと思われたのであろう。もう一つは最初の擬音者に踏襲していることである。最初、誰かが「那」「哪」を「nèi」「něi」と擬音すると、みんなが思わず踏襲するようになった。学術界においても社会学でいう群集心理があるのであろう。実は前節に引用した『現代漢語詞典』の「口語では、『哪』の後ろに量詞あるいは数詞プラス量詞が接続する場合、常に『něi』あるいは『nǎi』という」とする言い方、および『講談社中日辞典』の「『哪（nǎ）』は話し言葉ではしばしばněiまたはnǎiと発音する」という言い方によって、「哪」の「nǎi」の発音変化がすでに一部の学者に注意を払われていたことはわかる。しかし、この問題に対する深い考察は群集心理に阻害された。正確なところまでに達する直前で止まって、「『něi』あるいは『nǎi』」という言い方で自分の見解をあいまいに表している。このことによって、筆者は孟子と孔子の言葉を二つ想起した。一つは孟子の「尽く書を信ずれば、則ち書無きに如かず」（尽信書、則不如無書）という。つまり考えもせずに従来のすべてに盲信して、その中の誤りからまちがったほうに導かれることより、むしろその通説がもともとないほうがよい。もう一つは孔子の「学びて思わざれば則ち罔（くら）し」（学而不思則罔）という。すべての研究は通説を再検証するうちに発展するのではないだろうか。もちろん筆者の仮説も多くの検討を要することは言をまたない。諸賢の御批正を切に乞う次第である。

附表

指示代詞表

指称 種類	コ	ソ・ア	ド	用例
	这 zhè	那 nà	哪 nǎ	
量詞後綴り (単数)	这＋量詞 zhè/zhèi	那＋量詞 nà/nài	哪＋量詞 nǎ/nǎi	这个 zhèige
不定量詞後綴り (複数)	这＋不定量詞 zhè/zhèi	那＋不定量詞 nà/nài	哪＋不定量詞 nǎ/nǎi	这些 zhèixiē
方位詞「里」後綴り	这里(这儿) zhèli (zhèr)	那里(那儿) nàli (nàr)	哪里(哪儿) nǎli (nǎr)	
様態	这样 zhè (zhèi) yàng	那样 nà (nài) ynàg	怎样 zěnyàng	这样的人 zhèyàng de rén
	这么 zhème	那么 nàme	怎么 zěnme	这么写 zhème xiě

（出典：『中国語急就篇』p.21 ）